
パーソナリティの発達

C・G・ユング著

横山 博監訳，大塚紳一郎訳

みすず書房，四六判312頁，4,400円，2024年3月刊

（京都ヘルメス研究所・京都大学名誉教授）山中康裕

久しぶりの、ユング自身の著作からの翻訳である。これは全18巻あるドイツ語版ユング著作集の第17巻〔Über die Entwicklung der Persönlichkeit, 1972（ユングによる実際の著作年は1910～1934）〕の全訳である。ユングの翻訳がただでさえ難しいのは、彼のギリシャ語・ラテン語などの古典語は言うに及ばず、独仏英蘭などほとんどの欧米語を駆使してのもともとの文章そのものからしてとても難解なことによるのだが、本書は内容的にも錬金術やホロスコープ・神話学・宗教学に触れる部分が少なく、比較的そういうことから免れているので、一人の翻訳で済んだのであろう。一読して、ユングの書きっぷり話しっぷりがそのまま伝わってくるような良い訳であった。一昔前やふた昔前の場合、以前評者が批判したように、たとえ訳者が高名なドイツ文学者であっても精神科医や臨床家でないために、何を論じているのかさっぱり要領を得ない文章にほとんど困ったものであったが、本書の場合論旨も明快であり、しかも、訳者の解題とあとがきとで、要領よく趣旨がまとめられているので、とても読みやすかった。

さて、本書は、ユングの「子どものこころの葛藤」「教育についての分析心理学の意義」「才能に恵まれた子ども」「パーソナリティについて」「心理学の関係としての結婚」「人生の転期」などを主とする、ほぼ〈子ども論〉が中心であるが、ユングは、これらにおいて、現在われわれの間では、〈転移〉という概念で扱っている現象の理解に、Levi-Bruhl, L (1910) の〈participation mystique 神秘的関与〉な

る概念を用いて、子どもへの親の無意識的影響や、同時に therapist が共有する不思議な感情について強調しているのが出色である。

なお、本書のタイトルともなっている論文「パーソナリティについて」は本書の根幹とみてよい。しかし、これも訳者も言うように、実は、人間の一生にかかわるもので、大人の問題でもあるのだ。論文が書かれた年代は、先に触れたように、1910年から1934年と、いわば我が国の年号でいえば、明治43年から昭和9年と、ほぼ100年前のスイスでの論考であるから、人は、とても古いものと考えであろうが、内容を読む限り、そうでもなく、現代にも立派に通ずるところが多々ある。

さて、その「パーソナリティについて」についてであるが、これはそのままユングの中核概念である「自己実現」について述べている、と考えてよさそうである。ゲーテの「地上の子どもたちの最上の幸福は人格（パーソナリティ）である」や、シラーを引用して、「残念ながら、善なるものは永遠に善ではない。したがって、世界史には、善なるものが退かねばならないときがある。だからこそ、より善なるものになるという宿命を授けられた者がはじめのうちは悪として登場し……、私たちの中にある未発見の道は心の生き物のようなもので、……中国の古典哲学はこれを『道（タオ）』と呼び、目的地に向かって頑として進む水の流れに譬えている」とする。ここにおいて、ユングは、「子どものために大人が果たすべき最も重要な役割とは、子どもではなく、[大人が] 自分自身を治療し、教育し、成長させること。すなわち自分自身のパーソナリティを発達させることである」と強調しているが、このことこそが、本書全体の目玉と言ってもよいだろう。

原書：Carl Gustav Jung：Über die Entwicklung der Persönlichkeit